



## 『あらゆる境遇に処する秘訣』 副学長 奇 恵英

私たちが生きる中で一生付き合わなければならないものの一つに「不安」があります。生きる限り「不安」から逃れることはできません。人の心に不安を呼び起こすものは、目に見えないもの、まだ起きていない事柄です。

目に見えないものは、私がコントロールすることができません。目に見えれば避けるなり、安全なところに入れて出てこないようにするなり、何らかの対策が考えられます。目に見えないものの一つに未来があります。まだ起きていない事柄は未来のものです。予見ができて、その結果に確信があれば不安にならないと思いますが、大半の未来のものはそれが今目の前で事実にならない限り、なかなか完全な確信が持てず、不安が付きまとうものです。学生のみなさんが、一所懸命に頑張って勉強をしてテストを受け、その結果を待つときに、大丈夫と思いながらも期待した結果を目にするまで、安心できず、落ち着かないのもその一例です。

このような不安の性質は、私たち人間の本质とつながっています。私たちは身体をもって、「今・ここ」の一瞬一瞬を生きることしかできません。私たちにとって確かなものは、触れてわかる、聞こえてわかる、味わってわかるなど、身体を通して確かめられるものです。したがって、目に見えないものを信頼する、あるいは目に見えないものを恐れないためには、自分の考えを確かにもって、私が信じる、あるいは、私は恐れない、と自分が決断する必要があります。

私たちは「今・ここ」を生きる存在として、一步後ろの過去に戻ることも、一步先の未来を生きることもできません。それで多くの人たちは、失敗をすることを恐れます。失敗をした場合に、過去に戻ってやり直すことはできないからです。今の失敗を過去のせいにする人はなおさら失敗を恐れるようになります。そして、思いかけないことが起きないように、今描く安全・安心な未来が現実になるように、いろんな努力をします。親は子どもに安定的な職業を選ぶように勧めます。世の中には病気にならないようにいかに健康を守るか、という情報や広告があふれています。





それでも人は病気になり、事故に遭い、思いかけない不幸や喪失に出会います。東日本大震災が起きた時に「未曾有」という言葉が頻繁に使われました。かつて体験したことがないこと、こういうことがあるとは想像もできなかったことを私たちは体験したわけです。それから10年、今度は新型コロナウイルスに見舞われ、また「未曾有」という言葉を聞くようになりました。まさか去年に続き、今年のゴールデンウィークも移動自制が必要になり、たくさんの方が苦しむことになるとは思いませんでした。

しかし、まだ来ていない明日は私たちにとっていつも未曾有のものになり得ます。人の計算と想像力で計ることはできません。それを見えるものにし、計りうるものにして不安から逃れようとする事自体が無駄な努力だといえます。不安から逃れようとしたり、不安を無くそうとしたりするより、その不安を抱えてもなお、今日一日を私がどのように生きるかを大事にすることが不安に打ち勝つ方法であると思います。

今日の聖書の箇所であるフィリピの信徒への手紙を書いたパウロは私を強くしてくださる方によって、ありとあらゆる境遇に処する秘訣を心得たと言っています。何が起きるか、何がやってくるかを心配するのではなく、どんな境遇でもそれを生きる私の姿勢が大切です。パウロは神様の中にいることによって、その姿勢、力を得ると言っています。神様は苦難を無くしてくれるのではなく、その中を生きる力を与えてくださると言っています。その苦難において私たちを一人にしておくのではなく、神様が共におられることを信じることで、パウロは大きな力を得ています。

私たちが今、外に目を向ければ大きな不安を感じる苦難の中にいます。しかし、自分自身に目を向けて、一人でないことを覚え、この境遇の中で、自分でできることをしながら、一日一日をしっかりと生きていきましょう。

このような思いで、新学期からオンライン授業の学生も対面授業の学生も、毎日自分の健康管理習慣の一つとして、体温調査フォームを送るようお願いしています。ぜひ覚えて毎日送るように重ねてお願いします。心をつなげてコロナ禍前の日常を取り戻せるように、一緒にこの時期を乗り越えましょう。

